

研究ノート

パキスタン・スィンド州における「ムハージル」の変容

近藤 高史

はじめに

パキスタンの4州のうち、スィンド州は1947年の印パ分離独立の際に「分割されず、かつその多数派集団（スィンディー）が他州に殆ど住んでいなかった州」という点において他州とは異なる特徴を有していた。しかし、州都カラーチーには多くの産業が集中し、現在推定人口1,400万人を擁し、国家歳入の55～60%を生み出す経済の中心となっていることからわかるように、パキスタン建国後国内各地から多くの住民の流入があり、その特徴も変化していった。カラーチーへの人口流入は大別して4度に分けられるとされるが〔広瀬 1998〕、これらに加え1990年代、スィンド州の内陸部の治安悪化を背景としたスィンディーの流入があったことが明らかになってきている。

このように、パキスタンの中でも、カラーチーは特にその多民族性という意味において、パキスタン社会の縮図ともいえるべき様相を呈している。

そのカラーチーで最大の言語集団が「ウルドゥー語話者」(Urdu Speaker あるいは Urdu Bôlá Wâlâ などと呼ばれる)である。パキスタン国内でウルドゥー語話者の人口比率は現在7%程度と見られているが、その大部分がカラーチーを中心としたスィンド州都市部に集中している。

1980年代以降、MQM (Muhâjir Qaumî Movement, 1997年に Muttahida Qaumî Movement に党名変更) がカラーチーで勢力を伸張していく中で、同党の支持基盤とされ、「ムハージル」と呼ばれる「インドからの移民とその子孫達」が有力なエスニック集団として注目されるようになった。既に独立後30年が経過し、実際に彼らの中でインドからの移住を経験した人々は当初の4分の1にまで減少したにもかかわらず、移民としてのアイデンティティを依然として保持されていたことは興味深い。

「ウルドゥー語話者」と「ムハージル」という二つのエスニック・アイデ

ンティティーの間には複合する部分も多く、後者が主としてウルドゥー語を日常語として使用することから、「ウルドゥー語話者＝ムハーシル」というように両者は同義的に用いられることがある。

ところが両者を同義的に用いることは、「ムハーシル」集団の変容やこのエスニック集団の政治的覚醒過程を看過してしまう問題点があるにもかかわらず、これまで十分検討されることがなかった。加えて、現在「ムハーシル＝MQM 支持者」と見なす傾向があるが、MQM に対しては 1990 年代にカラチーにおいて騒乱を引き起こしてきたイメージが今でも根強く残っており、このような図式でムハーシルやウルドゥー語話者をみなすことは彼らへの否定的な誤認識を生み出すことにも繋がりがかねない。

こうした問題意識もあり、小稿ではパキスタン建国後から 1950 年代にかけての「ムハーシル」社会の内部動向を、「ウルドゥー語話者」との複合性及び相違点を意識しながら素描・整理することを目的とする。

1. 独立当初のムハーシルの社会的基盤

周知の通りパキスタンでは、本来ムハーシルとは 1947～51 年にパキスタンへ移住したインド・ムスリムを指していた。その中でも特にムハーシルとしての強いアイデンティティーが保持されたのは、彼らの 18% が移住したスィンド州においてであり、小稿の分析対象もスィンド州に移住したムスリムである。

彼らはスィンド州人口の 11.7% を占めるようになり、都市部に集中して移住した。そのためカラチーからは多くのヒンドゥーが去っていったにもかかわらず、分離独立期の間はその都市人口は約 2 倍に増大した。彼らは都市の中で独自のコミュニティーを構成し、独自のエスニック・アイデンティティーを発達させていったのである。ムハーシルは英領インドのデリー、連合州、中央州、グジュラート州、ラージャスターン州、旧藩王領のハイデラバード及びカシュミールの出身者が多く、出身地によって母語が異なっていたが、移住先ではウルドゥー語を用いたので、少なくとも独立当初は「ウルドゥー語話者」はムハーシルと重複する部分が多かったといえる。

ムハーシルの大半は都市中産階級であった。パンジャーブ州に移住したム

スリムとは異なり、ムハーヅルはパキスタン移住の途上で虐殺に遭遇することは少なかった²⁾。むしろ彼らは移住にあたっては綿密な計画を立て、一族の一部を先遣隊として送り、住居等生活基盤を確保させてから移住したのである³⁾。したがって、「貧しく抑圧された難民」というようなイメージは少なくともスィンド都市部に移住したムハーヅルには当てはまらない [Das 2001]。

ムハーヅルはほとんどが非農村出身者で、非熟練労働者はわずかに 15.5% であった。その他の内訳は事務系・営業系労働者 40%、サービス労働者 16.8%、技術労働者（主に製造業）21.8%であったといわれている。ムハーヅルはこのように中産階級的な性格が強く、カラーチーでいえば、ムハーヅルは専門的・技術的職業ポストの 60%程度を占めていたという。

もちろん、その中には専門技術・知識を有していなかったり、就業できないムハーヅルもいた。しかし、ムハーヅルの中ではいわば低所得層に位置していたこれらの人々も、教育は受けており、ムハーヅルの識字率は概して高かったことが特徴的である。1951 年当時、ムハーヅルが集中して居住したカラーチーは住民の識字率が 23.4%で、この数字はパキスタン全体の 13.2%に 対し非常に高かった。

こうした性格を帯びていたことから、彼らには他のコミュニティに比べ社会的地位を上昇させていく可能性を多く備えていた。建国後間もなく勃興してきた商業資本家層の大部分もムハーヅルであった。

ところで、1948 年 2 月 18 日の立法議会で、当時のスィンド州首相アイヌーブ・クフロは、「ムハーヅルの 45,000 人をタールバルカールに、30,000 人をナワーブシャーに、25,000 人をハイデラバードに定住させた」と述べており、同発言から移民を特定地域に偏らないように定住させる配慮がなされていたと推測できる。それにもかかわらずカラーチーにムハーヅルが大挙して流入することになった理由として、リヤークト・アリー・ハーン首相らムハーヅルの政治家が選挙基盤を確立するためであったとの指摘もなされているが、この点に関しては未だに確固とした史料は出ていない[Rahman 1997]。

ともかく、ムハーヅルが大挙して移住した首都カラーチーは州内のどの都市にも増して多くの機能が集中した。その中でムハーヅルが社会的地位を向

上させていく環境整備を行ったのは官僚機構である⁴⁾。文民官僚・都市知識人層においても、ムハージルの割合は高かった。ムハージルのパキスタン社会における有利さとはまさに、文民官僚が大きな権力を握り、社会経済発展に影響力を行使し、都市知識人層が国家イデオロギーの構築に大きな役割を担っていたことにあった。

2. 移住者としてのムハージル・アイデンティティー

当然のことながら、移住後間もなくムハージルは「パキスタン人」と「ムハージル」という二つのアイデンティティーの狭間でエスニック・アイデンティティーの問題に直面した。しかし結局彼らは、前者を地域主義者とは異なるという点、後者を自分たちが旧来からの住民とは異なるという点において、双方のアイデンティティーを主張した。彼らにとって二つのアイデンティティーは複合性が高く、取捨選択する対象ではなかった。

例えば、政治的主張を行う時、ムハージルの政治的主張は「国民の利益」の主張を借りて、自らの利益を追求するものであった。ムスリム連盟などは特にムハージルの利益を代表しており、パキスタンの中枢であるムスリム連盟、内閣、官僚機構の中において、ムハージルの占める割合はどの集団よりも高かったことは指摘するまでもない。リヤークト・アリー・ハーンが初代パキスタン首相になったように、ウルドゥー語を話すムスリムはパキスタン運動の知的側面を支えたのみならず、独立後のパキスタン政治機構においても重要な地位を占めたのである。

次に国家や他の集団との関係において、彼らの主張はイデオロギー的傾向を強く帯びていた。その際、特に「イスラーム」が彼らのイデオロギーの中心であったことは、彼らが保守的な解釈をしばしば施すところにもよく現れていた。国家建設を急ぐパキスタン政府は、統一のためのイデオロギーを欲していた。ウルドゥー語や「二民族論」はその中心を構成するものであり、この方針はムハージルの利害と一致した。これらが政府によって前面に掲げられることは州自治への強い制約を意味した。ベンガル語国語化を掲げる東ベンガル州の自治要求への当時のパキスタン政府の対応ぶりは、好例であることはいうまでもない。

3. ウルドゥー語とムハージルの特権的地位

ムハージルはパキスタン建国当初に彼らが有していた有利な経済的・政治的条件から他のエスニック集団と比較し特権的な地位を得ていった。その中では以下のような諸条件も特権的地位を強化した。

- ① 教育を受けていたために官僚層において支配的地位を占めることができた。
- ② ムハージルの中産階級は教育機関（カラチー大学など）、マスメディア等のホワイトカラー層に吸収されていった。ラジオ・パキスタンや新しくできたウルドゥー語系・英語系の報道機関はムハージルの就業先になった。
- ③ 1948年8月にカラチーは連邦首都としてスィンドから切り離された。1955年にはカラチー以外のスィンド州域は他州と統合され、「西パキスタン州」（＝「ワン・ユニット制」）とされた。これによりカラチーはムハージルにとっての民族州のような存在となった。
- ④ パキスタンの国語がウルドゥー語になった（後にベンガル語も同じ地位を与えられる）。独立以前からの住民であるスィンディーの学生はウルドゥー語の学習を義務付けられたが、スィンディー語がムハージルへ教えられることはなかった。

ここで、④に関して、いわば少数派の言語であるにもかかわらず、ウルドゥー語が何故国語に選定されたのかという問題がある。これに対し人民党政権の一時期を除く歴代のパキスタン政府は、「ムガル王朝時代以来のインド・ムスリムの伝統」や「ウルドゥー語が優れているため」と回答していた。しかし真の理由はむしろ建国当初のエリート構成に起因するものであろう。西パキスタンで支配層を構成したのは資本家や高位の軍人であるが、ウルドゥー語話者のムハージルは双方に多数が進出しており、パンジャービーやパシュトゥーンは後者に多くの人材を輩出していた。エスニシティに関わらず、軍人の多くは植民地時代にデリーその他でウルドゥー語の教育を受けていた⁵⁾。いわばウルドゥー語はエリート層の社会的地位を支える言語として選定されたという経緯がある。

加えて、独立後のパキスタンの経済発展がウルドゥー語を共通媒介手段の地位に育て上げたことも否定できない。経済的繁栄を享受する者はウルドゥー語の修得が必要であったからである。工業の中心地としてのカラチーの発達は、最初ウルドゥー語話者を工場労働者として雇うことから始まっており、他の言語を話す労働者も職を得ようと思えばウルドゥー語を使用せざるを得なくなっていた。こうして労働者の間に共通言語としてウルドゥー語が広まっていったのである。

またスィンド以外の3州で識字言語としてウルドゥー語が採用されていたこともその普及に寄与した。これら3州では、パシュトゥーンやパローチーは政府関係機関への就業や、高等教育機関への入学を希望すれば、ウルドゥー語を受け入れないわけにはいかなかった⁶⁾。

他言語と比較し、スィンディー語は他言語に比べて発達の度合いが濃く、本や新聞も多数発行され、タイプライターで打ち出されるようになったのもウルドゥー語よりもずっと早かったことは知られている⁷⁾。しかし、①パキスタンに残ったスィンディーは小作人階層が中心で教育機会に恵まれない人々が多かった、②スィンディーは州内陸部に多く、首都カラチーにはスィンディー語のメディアが存在しなかった、といった二つの条件により、ウルドゥー語と同等の扱いを受けることはなかった。ウルドゥー語に代わるものとして持ち出されたのは、公用語としての英語使用の継続である。

同じムハーヅルでも、カラチーに移住した集団とスィンド内陸部に移住した集団とでは構成が異なっていたことにも注目する必要がある。カラチーに移住したムハーヅルのうち、僅か10%が非熟練労働者であった。また上層中産階級の多くはカラチーに移住し、官僚や裕福なビジネスマンも同様であった。一方内陸部のムハーヅルは下層中産階級出身者が多数を占めた。また高等教育を受けていた者が前者に、そうでないものは後者に集中する傾向を示していた。しかも、カラチーのムハーヅルとは異なり、ハイデラバードやスィンド内陸部のムハーヅルはスィンディーの中で生活していた。こうした事情も手伝い、スィンド内陸部のウルドゥー語話者の子弟は、1956年の「西パキスタン州」誕生によりウルドゥー語の学習が強制されてもスィンディー語の学習をやめなかった。以上のように、都市部と農村部に居住す

るムハーシルの間では他のエスニシティとの関係に相違が見られた。

実はパキスタン建国当初、シンディー語は多くのムハーシルが学んでいた。シンディー語が軽視されるようになったのは、軍政時代に入って2～3年毎に国内各所を異動する軍・官僚層から「執務に必要ない」という指摘を受けるようになったからである。要するに、ウルドゥー語話者の有利さとは、ウルドゥー語への有利な扱いのみならず、他言語の話者が不利な立場に置かれていたことにも支えられていたのであった。そしてスィンド州においてはウルドゥー語によってシンディー語を代替する位置付けがなされたために、両話者のコミュニティー間で亀裂が深まっていったといえよう。

4. 軍政とムハーシルの政治的分極化

1950年代に入り、ムハーシルとムスリム連盟との関係は悪化していく。この時期、多くのムハーシルがムスリム連盟の腐敗・汚職や政権交代の繰り返しによる行政能力の低下に失望を覚えはじめていた。これに対し、イスラーム協会 (Jamāat-e-Islāmi, 以下JIと略記) はムハーシルの間で支持を伸ばした。JIの主張はイスラームを訴えるだけでなく、ムハーシルの利益を増進する内容 (ウルドゥー語と都市中産階級を重視する) であった。JIにムハーシルの支持が集まったことは、むしろ彼らのパキスタン・イデオロギーが強化される効果をもったといえる [Kalim 1983]。

1958年のアイユーブ・ハーンの軍事クーデターによる権力掌握は、軍がムハーシルの多かった文民官僚の権力を削減していくプロセスの開始であるとみなされることも多いが、政策上は官僚制強化が実施された時期である。このアイユーブ・ハーン政権期、パキスタンは「途上国の優等生」と呼ばれるほど急速な経済成長を遂げた。カラーチーやスィンド都市部では、需要の拡大する一般工場労働者をパンジャービーやパシュトゥーンの国内移住者によって補充していた⁸⁾。これに対し相対的に教育水準の高かったムハーシルは、一般工場労働者になるよりも、熟練技術労働者や中小企業家として、または急速に拡大するサービス産業あるいは政府関係職のホワイトカラー層の中核を形成していった。

また、アイユーブはシンディー系ヒンドゥーが残して去った農地を、既

にそこに住みついていたスインディーの小作人から取り上げてムハージルに
分与し、さらにムハージルの貧しい階層のために 25,000 件の住宅をカラー
チーに建設してムハージルの住居問題に終止符を打とうと試みた。このよう
に、軍政下でもムハージルは有利な扱いを受けていたといえる。

しかし、経済成長は同時にムハージルの間に摩擦を作り出した。この問題
は「ワン・ユニット制」やパキスタン文官職 (Civil Service of Pakistan, 以
下 CSP と略記) の割当制と関わるものである。

既述のように CSP はウルドゥー語を使用するムハージルにとって魅力的
な就業先であった。しかし 1954 年にベンガル語が国語として承認されたこ
とに加え、ウルドゥー語教育の普及によりムハージルのウルドゥー語話者と
しての有利性は相対化されていく。また、経済発展と共にムハージルのホワ
イトカラーへの進出傾向が強まっていく中で、CSP 割当制によってスィンド
州に留保された採用者数はムハージルにとって不足しがちになってくる。

さらに「ワン・ユニット制」の導入で、スィンド各地に移住してきたパン
ジャービーやパシュトゥーンがホワイトカラーへの職を求めようになっ
ていた。こうした中、アイユーブが新首都イスラマバード建設を決定し、
首都へのアクセスが不便になることは、とりわけムハージルの経済的に恵ま
れない人々、特に CSP への就職に希望を託していた人々の間に疎外感を引
き起こしたであろうことは想像に難くない。1950 年代以降、ムハージルの間
で割当制への反発が強まっていったのは周知の通りである。

1950 年代に入り、ムハージルが割当制においてそれまでの有利な地位を
保てなくなっていった例を示すものとして、興味深い数字がある。例えば、
「ワン・ユニット制」期におけるハイデラバード、カイールプールの二つの
郡 (District) では、郡行政官 90 人のうち、51 人がムハージル、25 人がス
インディー、14 人がパンジャービーであった。また警察職 159 人のうち、
64 人がムハージル、51 人がスインディー、44 人がパンジャービーであった。
さらに上の県 (=Division, 現在は廃止されている) レベルにいくと、17 人
のうち 9 人がムハージル、8 人がパンジャービーでスインディーは 1 人もい
なかった [Ahmed 1998]。

このように、カラーチーではパンジャービー、パシュトゥーンがムハージ

ルの CSP をはじめとする就職口を狭めていったといえるが、他方カラーチーでムハーシルが失ったポストの継承者がスインド内陸部のスインディー・コミュニティに向かう形になっていった。しかも 1958 年にはアイユーブがスインドの新開拓地を非スインディーの退役軍人や官僚に分与することを決定すると、スインド内陸部のムハーシルも旧来からの住民との接触が薄くなり、以降彼らはスインディー語の学習意欲を急速に失っていった。ムハーシルはスインド都市部においては、パキスタン国語の話者であるという旧来の有利性を活用できなかった人々が下層中産階級として取り残されていき、コミュニティ内部で孤立感を深めていくと同時に、農村部ではスインディーとの棲み分けが進み、自らが少数派であるという意識を深めていくことになった。現在 MQM が擁護する「下層中産階級の利益」は、この時期から切実に訴えられるようになったものである [Korejo 2002]。

「持てる者」と「持たざる者」に分極化していくムハーシルの実情は、「ワン・ユニット制」に関しての態度をなかなか決定できなかったことにも表れている。「ワン・ユニット制」は国内北部からのスインド各都市への移住が加速するもので、自らの職業機会を狭める性質を持っていたが、制度の趣旨自体は州自治の発展に消極的なムハーシルがこれまで掲げてきたイデオロギーに合致するものであったからである。

しかし、仮に「ワン・ユニット制」を撤廃することがムハーシルの政治的な要求として集約されていたとしても、ムハーシルの利益を充足する結果に直結するかどうかは不明確になってきており、むしろ農村部に多住するスインディーへの追い風になるものとも考えられた。こうした状況下で、ムハーシルは「ワン・ユニット制」を撤廃し、カラーチーを「(地元民である)スインディーに返す」ことは自らの土地を再び手放すに等しい、という判断を結局下すことになるのである [Jones 2002]。

まとめ・今後の課題

こうして、ムハーシルというアイデンティティーはムスリム移民社会の中で切り離された下層中産階級の間で徐々に強化されていくようになった。但しムハーシルの下層中産階級を組織化する政党は未だ存在しなかったので、

Jl の掲げるパキスタン・イデオロギー等は彼らの支持を集めることが出来た。実際に彼らの利益擁護を掲げる政党は 1980 年代に MQM として登場することになるが、MQM のいう「ムハーヅル」とはムハーヅル社会の中で取り残された下層中産階級を指すことになり、当初のスィンド州へのムスリム移民を指していた言葉と比較しその範囲は限定的になった。

MQM が 1990 年代中盤、孤立化を辿っていった背景には「ムハーヅルの下層中産階級」という、限定的な特殊利益しか代表しえなかったという事情があるが、こうした利益が形成されていく原点は小稿で扱った 1950 年代に求められるものである。ムハーヅルはパキスタン独立当時の有利な立場の故に、自らが政府に求める利益の分配を、他の集団も求めているということ認めにくい性格を帯びるようになり、そこからなかなか脱却できなかったといえよう⁹⁾。

さて、「典型的なパキスタン人」と見なされてきたムハーヅルのコミュニティーに亀裂が生じつつあった時期は、パキスタン国家論が不明確さを露呈した時期と重複している¹⁰⁾。リャーカト・アリー・ハーンらムスリム連盟の指導者の多くは、独立運動期にはパキスタン概念を抽象的な状態に留めることで人々の動員に成功した。これら指導者の多くはムハーヅルであり、独立後はパキスタンを、いわばウルドゥー語を媒介とした均質性の下に成り立つムスリム国家であると位置付けたが、幅広い州自治や各言語への適正な地位の付与を求める動きや、国内平等化を求める動きとは当然のことながら対立していった。こうした対立の中でイスラームの扱いも政争の材料となっていたものの、なおムハーヅル社会は全体としてイスラームの位置付けが曖昧なパキスタン・イデオロギーを強く支持し続けた。

しかしこれまで、「ムハーヅル」という言葉の持つ宗教的な意味合いにもかかわらず MQM 支持層とイスラームとの関係は研究の俎上に上げられることは非常に少なかったといえる。特に以前 Jl を支持していたムハーヅルの下層中産階級が、世俗的な MQM のスローガンを受容していくようになる過程には分析の余地があろう。また、ムハーヅルが組織化されていく中でのスィンド・ナショナリズムの影響も看過できない。これらは今後の検討課題としたい。

註

- 1) この数字は、後にスインド州に編入されたカイルプール藩王国の人口も含む。
- 2) このことはパンジャーブへの移民はパキスタンの定住先で旧来からの地元住民に全く同化されていったということを意味するものではない。例えば、ウィルダールの研究には、両者の間には投票行動に違いが見られるとの指摘がある。Wilder, Andrew R., *The Pakistani Voter: Electoral Politics and Voting Behaviour in the Punjab*, Karachi, Oxford University Press, 1990, p 59.
- 3) 多くのムハージルは独立後しばらく厳しい生活環境と失業のなかで耐乏生活を強いられたが、彼らの復興も非常に早かった。1959年にパキスタン経済開発研究所の行った調査によれば、バラックに住むムハージルの割合は他の集団より低く、電気・水道設備の整った住宅に住むムハージルの割合は他の集団より高かったという。
- 4) 分離独立時に、パキスタン政府が移住してきたインド文官職 (ICS) に対し、英領インド時代と同等の地位が保全される旨保証したことも助力となった。
- 5) 後に大統領になるジアー・ウル・ハックもデリーで教育を受け、中産階級出身で、ウルドゥー語を正確に話し、「人格的にはムハージルの一人であった」と評されている。なお、ムハージルは将官クラスの軍人には進出度が高かったが、相対的に低いランクの軍人にはさほど進出は見られなかった。
- 6) バローチスターン州でウルドゥー語が採用された背景には、①同州ではバローチーが 33.59%、パシュトゥーンが 28.04%とバローチーが圧倒的に多いわけではなく、バローチー語を州の公用語とするには民族アワミ党 (NAP) の反発を買う恐れがあった、②NAP は常に「地域の利害しか代表し得ない政党」であるとの批判があったため、「全国政党」であるということのアピールするためにはウルドゥー語を受け入れる必要があったということ、が挙げられる。
- 7) この当時に既に5つの日刊紙が発行されていた。

- 8) カラーチーの工場労働者は 1949 年に 21,652 人、1955 年に 66,110 人、1959 年に 115,167 人と拡大した。
- 9) この当時 (1958~59 年) でも、公務員職の 30%をムハージルが占めていた。
- 10) 例えば 1956 年に正式にスタートした「パキスタン・イスラーム共和国」は 1958 年に一度「パキスタン共和国」となったが、1963 年には再び「イスラーム共和国」に戻されており、イスラームの位置付けに関する逡巡がうかがえる。

参考文献

- 広瀬崇子「ムハージル民族運動とパキスタン国民統合の課題」(広瀬編『イスラーム諸国の民主化と民族問題』未来社：1998 年)。
- Afzal, M. Rafique, *Pakistan: History and Politics 1947-1971*, Karachi, Oxford University Press, 2001.
- Ahmed, Feroz, *Ethnicity and Politics in Pakistan*, Karachi, Oxford University Press, 1998.
- Bahadur, Kalim, *The Jama'at-i-Islami of Pakistan*, Lahore, Progressive Books, 1983.
- Das, Suranjan, *Kashmir and Sindh*, London, Anthem, 2001.
- Hassan, Arif, *Understanding Karachi*, Karachi, City Press, 1999.
- Hussain Altaf, *Pakistan Ki Azadi Ke Pachas Baras*, London, MQM International Secretariat, 2004.
- Jafri, A. B. S., *The Political Parties of Pakistan*, Karachi, Royal Book, 2002.
- Jones, Owen Benntett, *Pakistan: Eye of the Storm*, Lahore, Vanguard, 2002.
- Korejo, M. S., *A Testament of Sindh: Ethnic and religious Extremism*, Karachi, Oxford University Press, 2002.
- Korejo, M. S., *Soldiers of Misfortune*, Lahore, Ferozsons, 2004.
- Rahman, Tariq, *Language and Politics in Pakistan*, Karachi, Oxford

University Press, 1997.

Salim, Ahmed, *Muhâjir Qaumî Mûvment*, Lahore, Sarang, 2000.

Soomro, Khadim Hussain, *The Path Not Taken: G. M. Syed*, Karachi, Sain, 2004.

Talbot, Ian, *Pakistan: A Modern History*, Lahore, Vanguard, 1999.

(me449480@members.interq.or.jp)